［資料紹介］

『都風俗化粧傳』

川上 博子／ポーラ文化研究所

図 1.『都風俗化粧傳』文化 10 年（1813）

『都風俗化粧傳（みやこふうぞくけわいでん）』は、文化 10 年（1813）に出版された、江戸時代の総合美容本である。メーク、スキンケア、ヘアケア、手足などのケア、オーラルケア、髪型、姿勢など、美容に関する多様な情報が挿画付きでまとめられている。本資料以前の類書では、美容の記述は必ずしも具体的とはいえず、教訓書としての性格が強いもの、上流階級の礼法を伝えるものであったのに対し、本資料は美容情報を総合的かつ詳細に記した女性向けの実用書であった。著者の佐山半七丸の経歴は不明であるが、挿画を担当した速水春暁斎（明和 4 年（1767）-文政 6 年（1823））は京都の人であり、生家は裕福な呉服商だった[1]。「巻之上」「巻之中」「巻之下」の三巻からなり、序文や前書のほか、「顔面之部」「手足之部」「髪之部」「化粧之部」「恰好之部」「容儀（かたちつくり）之部」「身嗜之部」の 7 部で構成される。

「巻之上」の前書では、容貌が醜く、また直しがたい癖があっても、この書の方法で美人になれると謳っている。「顔面之部」においても、生まれながらにして全てを兼ね備えた美人は少ないが、化粧の仕方や顔のつくりで美人になれると説く。そして、当時の美人の第一条件を肌の白さと位置づけ、「顔貌の色を白うする薬方」「白粉をする伝」「白粉解きようの伝」といった肌を白くする方法を紹介している。このほか、「皺をのばし少女のごとくわかやぐ薬の伝」「紅を付ける伝」「鉄漿を付ける伝」「鼻の低を高ふ見する伝」「髪を洗う伝」「顔の恰好によりて髪結いようの伝」「歩行風俗（あるきぶり）の善悪（よしあし）」など、美容に関する様々な情報が収められている。ま

[1] 濱田啓介. 画本読本の作者 速水春暁斎伝攷. 国語国文. 30 巻 1 号. 臨川書店, 1961-01, p.17-31.

た、「耳だれ汁出るを治す伝」「霜やけを治する伝」「虫くい歯のいたみ治す薬の伝」など、治療を目的とする記述もあり、民間的な治療法を知る実用書としての側面も有している。
実践的な記述が多いものの、当時の女性に向けた教訓的な内容もあり、「巻之中」では、婦人の四徳（女性の守るべき四つの徳）を説き、姿と心は一体であること、外見をいかに美しく整えたとしても、心のあり方が正しくなければ意味をなさないと述べている。

図 2. 挿画は「鼻の低を高ふ見する伝」

文化 10 年に三都（京都・大坂・江戸）の四書肆から共同出版（相板）された『都風俗化粧傳』は、嘉永 4 年（1851）、明治以降にも版を重ねた。途中『女子風俗化粧秘傳』と改題され、大正 11 年（1922）まで計 6 回の刊行が確認されている。なお、版木は大正 12 年（1923）の関東大震災で焼失したという。およそ 110 年にわたり刊行されたロングセラー本であったが、時代が下るにつれて、美容の実用書としての位置づけが変わっていった。
明治 24 年（1891）の『風俗画報』では、「婦人の化粧方法を書きたるものなれども其方法今の実際に適せざるもの或は迂遠なるものある」と本資料について述べている[2]。大正 3 年（1914）の『朝日新聞』では、『都風俗化粧傳』を「今日の時勢にあてはまるように増補訂正」した御園文庫（伊東胡蝶園（のちの帝人パピリオ）の PR 媒体）の刊行計画を紹介している[3]。江戸時代の総合美容本としての情報には、当時の流行や嗜好と合致しない内容があったことが読み取れる。
また、好古堂から刊行された『女子風俗化粧秘傳』においては、大正初めに雑誌広告を出している。広告では「徳川時代に於ける京阪女子の風俗を知るに足るべき好個の参考書」[4]、「浮世絵研究家の好侶伴」と謳っており[5]、美容の実用書ではなく、風俗研究資料としての価値を訴求していた。
一方、大正 3 年の『節用』では、「都風俗化粧傳は、諸の化粧の拠所となれる種々の心得を集めたるもの」と紹介し、一部を除き翻刻している[6]。昭和 12 年（1937 年）8 月 22 日の『週刊婦女新

[2] 都風俗化粧傳抄録. 風俗画報. 第 25 号. 東陽堂, 1891-2-10.
[3] 都風俗化粧傳. 朝日新聞. 1914-2-24, 朝刊, p.7.
[4] 此花：風俗絵画雑誌. 第 23 号. 此花社. 1914-8-10.
[5] 浮世絵. 第 21 号. 浮世絵社, 1917-2-1.
[6] 節用（婦人文庫;第 3 回）. 婦人文庫刊行会, 1914-6-30.

聞』では、「今日に於てもなお捨て難き節が多い」と前置きした上で、「歩行風俗の善悪」を掲載している[7]。時代の変化とともに実用書としての読まれ方は少なくなるが、限定的ながらも共感や有用性が見いだされ、長きにわたり読まれていたといえる。

『都風俗化粧傳』は江戸時代の化粧文化を今日に伝えるとともに、その受容の変遷を通じて、人々の関心や価値観の変化を知る手がかりを与えてくれる資料である。

『都風俗化粧傳』

佐山半七丸[著], 速水春暁齋画図. 都風俗化粧傳. 巻之上中下. 〈京〉河南喜兵衛,〈京〉中川藤四郎, 〈江戸〉靄屋金助,〈大阪〉秋田屋太右衛門, 文化 10 年（1813）.

3 冊 ; 25×18cm. 巻之上 : 35 丁, 巻之中 : 31 丁, 巻之下 : 34 丁.

主要参考文献

佐山半七丸,速水春暁斎画図,高橋雅夫校注. 都風俗化粧伝. 平凡社, 1982 年.

佐山半七丸、速水春暁斎画図『都風俗化粧伝』. マキエ. No.4. ポーラ文化研究所, 1991-4-10, p.6.

[7] 佐山半七の都風俗化粧伝. 週刊婦女新聞. 婦女新聞社, 1937-8-22, p24. なお、「佐山半七」は原文ママ。